

## 論文

## ハイエクのマルクス批判

——その系譜と意義\*——

吉野裕介\*\*

## 要 旨

本稿の目的は、フリードリッヒ・ハイエクのカール・マルクスに対する評価の変遷を抽出し、その意義を闡明することである。ハイエクの長い執筆活動のほとんどは、自由主義（資本主義）の擁護と、社会主義の批判に費やされた。にもかかわらず、膨大な書き物のうち、マルクスあるいはマルクス主義に関する言及は、ほとんど断片的と言えるくらい限られている。この理由を探ることで、ハイエクの社会主義批判の意図がより明確になるのではないかと考えた。こうした問題意識に基づいて、本稿は、第1節で初期ハイエクの経済理論的考察、第2節で中期ハイエクの方法論的考察、第3節で後期ハイエクの社会哲学的考察の3つに活動時期を区切り、それぞれの時期におけるマルクスへの言及を抽出したうえでその意義を考察した。かくして、ハイエクによるマルクス批判は確かに徹底的とは言えないものだが、それはかれがマルクス思想の背後にある科学主義や合理主義を批判したことが一因だと結論付けた。

キーワード：ハイエク、マルクス、マルクス主義、社会主義、自由主義、合理主義  
 経済学文献季報分類番号：01-20：03-40

## はじめに

フリードリッヒ・ハイエク（Friedrich Hayek, 1899-1992）は、ほぼ20世紀に対応した時代を生き、その生涯のほとんどを執筆活動に捧げた思想家である。かれはほぼ一貫して自由主義を擁護し、社会主義を批判した立場に立って発言し続けた。その長い執筆活動の間には、社会主義だけでなく、ナチスによる独裁や、ジョン・メイナード・ケインズ（John Maynard Keynes, 1883-1946）あるいはケインズ主義、ひいては福祉国家といった思想を論難の対象とおいた。その際、かれの念頭に常にあったのは、その時代に支配的な思想によっ

\*本稿は JSPS 科研費19H01472の成果の一部である。

\*\*関西大学経済学部 e-mail: yoshino@kansai-u.ac.jp

て「自由が侵食される」という危機感であり、自由を守るために常に権力を監視し、その重要性を訴えねばならないという強い使命感であった。

ハイエクの考察のスタイルの特徴は、思想家の論説そのものだけでなく、それが前提とする思想や主義といった背景にある理念に批判の矢を向けるところにある。例えばケインズとの論争の際にも、金利の上げ下げや、実施すべき政策のあれこれといった表面的な論点を提出するだけでなく、ケインズ政策の背後にある、マクロ的な集計量あるいは統計学そのものに対する疑義を提出した。こうして政策上の論争の背後にある、思想や方法論上の対立を顕在化させるというアプローチで問題提起するのが、ハイエクの「戦略」と言えるだろう。

ハイエクの社会主義批判は、のちに全体主義や福祉国家論まで含めてそれらを人間知性の思い上がりだと諫める主張へと発展する。しかしながら、社会主義を代表する思想家であるカール・マルクス（Karl Marx, 1818-1883）やマルクス主張については、ところどころで部分的な言及はあるものの、体系的な批判を試みた痕跡が、著作や論文にほとんど見当たらない<sup>1)</sup>。ハイエクの社会主義批判は、なぜ直接マルクス批判に向かわなかったのか。ここに、本稿の問題関心がある。

同様にハイエクと対立的な思想を唱えた人物の代表的な存在として、ケインズが挙げられる。ただし間宮によれば、ハイエクとケインズは、小さい政府と大きい政府という対立する経済思想の提唱者であったが、理論的・政策的に対立しながらも、思想的な基礎には重なる点もあったという。なるほど両者には共通して、従来の自由が変容するという危機感と、その裏側にある大衆社会化に対する懸念があった<sup>2)</sup>。

独裁や社会主義の危険性を訴えた『隷従への道』（1944）のレビューの中で、ケインズは次のような感想をハイエクに寄せている。「政府と市場、どこかに線を引かねばならないという見解はあなたと変わらない。ただ、どこに線を引くか。これが問題なのだ」。そして続けてケインズは、次のようにハイエクに呼びかける。一旦政府に市場への介入を許したならば、その時計を逆に戻すのは難しい。その意味ではあなたも私も同じ「滑りやすい坂」の上にいるのだ、と<sup>3)</sup>。

---

1) 近年ハイエクに関するアーカイバルワークはとみに進んだ。これにより、かれの残した論考についてはほとんどが出版されている。また、原稿になっていない書き物についてもスタンフォード大学フーバー研究所所蔵のハイエク・ペーパーズでそのほとんどが確認できる。この事情に関する詳しい考察は吉野 [2014] を参照のこと。こうした状況をふまえれば、今後ハイエクのマルクスに対するまとまった論考が新たに発見されるとはきわめて考えにくいと言えよう。

2) 間宮 [2006] pp.205-207

3) ここでのやり取りに関する詳しい考察については Boettke [1995] を参照のこと。

このように、対立構造に置かれてきた思想家たちが、時代を経るなかで同じような側面を持つと指摘されることは、ままあることかもしれない。なるほどかれのマルクスへの評価が否定的なことは、いっけん想像するにたやすい。しかしながら、いくつかの先行研究によれば、ハイエクの思想体系とマルクスのそれとは、論法やその他の点で共通点が多いことも指摘されている<sup>4)</sup>。

たとえばバーザックは、ハイエクとマルクスが共に人間を「社会的存在」とみなしている点に共通点を見る。マルクスは人間を、経済という下部構造に規定される存在と考えていることは知られている。他方でハイエクもまた、個人の自律的な行動を重視するにとどまらず、それに影響を与えるルールや慣習といった社会的な制度を強調した。両者は共に、人間が社会と独立に存在するのではなく、「社会に規定される人間」をその分析の基礎においたのである。バーザックによると、こうしたハイエクの人間観は、マルクスの影響を強く受けたサミュエル・ボウルズやハーバード・ギンティスなど「異端派経済学」に属する「ポストモダニスト」とみなされる。さらにかれはハイエク以降の社会主義の成立可能性を、マルクスと共通したその人間観に求めた<sup>5)</sup>。

エーベンシュタインもまた、「ハイエクやオーストリアの経済思想には、よくマルクスとの関連を指摘される側面がある。かれの実際的な経済提言ではなく経済分析の考え方に、マルクス思想と似たところがあるのだ<sup>6)</sup>」と述べ、かれらの主張の中身よりも、むしろ思想のフレームワークに共通性があることを指摘した。

柴山も同様に、エーベンシュタインの議論を踏襲しつつ、「ハイエクは資本主義のネガティブな側面を強調するマルクス主義を、事実に基づいていないと批判していた。しかしマルクス本人は、資本主義を必ずしも否定的に捉えているわけではない。封建社会から市民社会、すなわち資本主義への移行はマルクスにとっても人類の偉大な進歩と捉えられていた。……『資本主義がプロレタリアートに命を与えた』というハイエクの認識は、マルクスのものであったのだ<sup>7)</sup>」と評価した。両者は目指すべき将来像は異なるものの、柴山の言葉を借りれば「資本主義のダイナミズム」に関する認識は重なるところが多いと言えよう。

小島も同様に、マルクスの人間に関する叙述を引用したのちに、「そこでの人間存在は、現実の市民社会における排他的（個人的）利己主義者＝『個々人としての万人』ではなく、ハイエクの真の個人主義に当該するような社会的共同存在、社会性・共同性に埋め込まれた

---

4) 他にも Sciabara [1995] ; Vorhies [1989] ; Rosner [1988] を参照のこと。

5) Burczak [2006] p.3

6) Ebenstein [2001] p.227 訳 p.304

7) 柴山 [2014] p.239

個人＝『万人としての個々人』として存在しているものでなくてはならない<sup>8)</sup>』と述べ、ハイエクにおける人間の想定をマルクスと同様に、個人が社会と独立に存在するのではなく、社会に規定された存在だとみなした。

両者の目指した経済体制は、対極に位置するものであったにもかかわらず、その思想に共通点があるというこうした指摘は確かに興味深い。しかしながら、いや、であればこそ、ハイエクは、なぜマルクスに対して、体系だった批判を残さなかったのだろうか。ここに、われわれがハイエクを読み返す意義があると思われる。この問いを考えることで、かれが真に批判しようとした思想が見えてくるのではないか。

以下では、ハイエクが時代ごとに、マルクスにどのように直接言及してきたのかを中心に検討するが、ここでさしあたって、ハイエクの活動時期について、ベッキの近著にならい、次の三つの区分を採用したい。すなわち、1. 1920年代から40年代の理論的考察に取り組んだ初期、2. 1940年代から1960年代の社会哲学の基礎概念や、方法論的な分野の論考を多く残した中期、3. 1960年代から1980年代の自由主義思想の集大成となる著作を多く残した後期、である<sup>9)</sup>。

こうした時代区分に基づいて、第1節において初期ハイエクにおける理論的な論考のなかで、マルクスにどう触れていたかについて検討する。第2節においては、中期ハイエクにおける方法論的な分野の議論とマルクスがどう関連するかを吟味する。第3節においては、後期のハイエクが比較的晩年に書かれた社会哲学的な著作群において、マルクスをどう位置付けていたかを考察する。最後に、第4節では、考察を小括するとともに、現在再評価が進むマルクスのように、ハイエクについても、現代的な関心に基づいて読み直すとすればどうなるか、という可能性について考えたい。

ただし本稿の関心の範囲は、あくまでハイエクのマルクス評価の変遷あるいはその背後にあるかれの主張の解明にあり、マルクスとハイエクの主張を比較検討することではない。このため、マルクス自身のテキストへの言及や分析は控えて、あくまでハイエクが自身の書き

8) 小島 [2004] p.151

9) 多岐にわたるハイエクの著作全体における論調や立場の変化をどのように解釈するかについては、いわゆるハイエクの「転換問題」として研究者の間で長年議論されてきた。ベッキは、これらの論調の変化を、矛盾を孕んだ「緊張」として理解するのではなく、むしろかれの一貫した社会理論を構築するための一連の「格闘」であったと解釈する (Boettke [2018] pp.283-295)。筆者も同様に、ハイエクのこうした関心領域の拡大や、論調の変化について、「転換説」や「分裂説」を取るよりも、漸次的な移行と捉える方が自然だと考えている (吉野 [2014] p.19)。したがって、ここで初期・中期・後期という時期に分けてかれの執筆活動を区切ることも、さしあたってその方法論のラディカルな転換を意味するものではないことを注記しておきたい。

物のなかでマルクスにどう触れていたのかの整理が中心となる。改めて述べるまでもないが、経済思想や社会思想を論じるうえでマルクスは、きわめて大きな存在であり、膨大な先行研究の蓄積がある。したがって、マルクスの文献や研究の全貌を渉猟して評価することは、ここで筆者の手に余るテーマである。こうした譲歩をおいたうえで、本稿の主たる課題をハイエク側から見たマルクスないしマルクス主義の検討と設定したい。

## 1. 初期ハイエクにおけるマルクスへの言及

### 1-1 経済理論的考察

本節では、初期ハイエクの理論的考察から、マルクスへの言及を確認する。いっけん意外なことだが、ハイエクは自らの経済理論について、マルクスからの影響を隠さないのである。

そもそもハイエクの経済理論は、景気変動の原因として貨幣的な攪乱要因を強調する。かれの説明では、金利操作や貨幣発行量が操作されることで、物価の相対価格が歪められ、原材料に近い「低次財」と、最終消費財に近い「高次財」の間で不均衡が生じる。本来回るべきところにお金が回らず、モノが不足し、値段が急騰する状況、それが恐慌の始まりである。それは、実物より貨幣的な要因を重視するオーストリア学派的な伝統を受けついでアプローチとも言えよう。マルクスにも「擬制資本」という用語があるが<sup>10)</sup>、これは実質貯蓄なしに通貨制度を通じて供給される資本のことを指す。こうした考え方や、信用が景気変動の主な原因であるという解釈は、ハイエクにも共通するものである。

さらに、ハイエクの景気循環の説明は、景気変動の要因として貨幣の価値変動だけを強調するのではなく、貨幣が生産構造の変化に与える影響をも重んじることに特徴がある。政府は、価値の乱高下を避けるために、貨幣発行量をその都度操作するような介入を逐一行ってはならない。むしろそれを常に一定に保つことで、物価の安定を図ることが望ましい。このためハイエクは、政府（あるいは中央銀行）の介入は、最低限が望ましいと結論づける。こうした理論的主張は、のちの政治思想的な主張とも整合的である。

そもそもハイエクによれば、景気循環が起きること、言い換えるとある程度の周期で恐慌が起きることは不可避的である。自然災害に例えれば、定期的に必ず訪れる台風に対して、それを無理に避けようとするよりも、より少ない被害でやり過ごすことを考えるべきだ。こう主張するのである。

---

10) マルクスの擬制資本に対する説明については、例えば飯田 [1984] を参照のこと。

資本主義システムに恐慌が不可避的だと考えるのは、マルクスも同様であろう<sup>11)</sup>。エーベンシュタインも指摘しているように、そもそもハイエクのこうした理論的アプローチは、ドイツ語圏の経済学者シュピートホフやカッセルなど非貨幣論者の立場に近い<sup>12)</sup>。そしてこのことは、かれらが影響を受けたマルクスの立場とも近いことを意味する。なるほど『貨幣理論と景気循環』（1933）の脚注に、景気循環論における貨幣説と非貨幣説の違いについて述べた箇所がある。

「ドイツ語版の出版以来、さまざまな景気循環論の中で最も重要な違いが貨幣説と非貨幣説の違いだとは思えなくなってきた。貨幣説を取る人びとには、景気循環の決定要因として貨幣の価値変動という表面的な状況を重視する派と、（筆者注：自分のように）貨幣を起因とした生産構造の変化を強調する派がいる。この二つのグループの違いの方が、生産構造を強調する貨幣論者とシュピートホフ教授やカッセル教授のような非貨幣論者との違いより大きい<sup>13)</sup>」。

このようにハイエクは自身の経済理論がドイツ語圏の経済学者、ひいてはマルクスの系譜に位置付けられることも示唆した。

さらに、『資本の純粹理論』（1941）においても、次のような記述がある。

「あらゆる（景気循環）理論を通じて根本をなす説がある。好況期の終盤には、流動資本が不足し始め、そのため金利が上昇する。すると、固定資本の大規模な投資や、新たな工場を操業して利益を上げることが不可能になる。このような状況と信用拡大の関係についてはさまざまな人間が論じているが、ここでその議論を取り上げるのは本題から外れることになる。また、そうした議論がカール・マルクスの恐慌論（theory of crisis）に及ぼした影響を取り上げることもここではできない。マルクスを通じて M.v. トゥガン＝バラノフスキーへ、そしてトゥガン＝バラノフスキーを通じて、われらと同時代の G. カッセルや A. シュピートホフへと、それはつながっている<sup>14)</sup>」。

11) ハイエクの恐慌論については江頭 [1997] を参照のこと。マルクス主義の恐慌論については、日本においては宇野弘蔵の『恐慌論』（[2010(1953)]）が関連する著作としていまや「古典」と言えるであろうが、近年におけるマルクスの恐慌論に関する考察については伊藤 [2014] を参照のこと。

12) Ebenstein [2001] p.228 訳 p.305

13) Hayek [1933] p.41 訳 p.114

14) Hayek [1941] p.381 訳 p.172

こうして、経済理論的考察に取り組んでいた初期の段階においては、ハイエクはマルクスやその他のドイツ語圏の経済理論を吸収し、自らの学説に反映させていたと言える。これは、ウィーンで生まれ育ってウィーン大学に学び、オーストリア学派の影響を受けて学者となった出自を考えれば、当然と言えるかもしれない。ただし、1931年にイギリスに渡り、その後は経済理論的考察にほとんど関心を払わなくなってしまうと、マルクスやドイツ語圏の経済学者の名前はハイエクの論考からひとまず消えていく。

のちのハイエクの貨幣発行自由化論あるいは非国有化論に代表されるようなオーストリア学派の経済理論は、しばしばマルクス派のそれとも共通点があることは、たびたび指摘されてきた点でもある。しかしながら大黒は、宇野弘蔵の「価値形態論」とメンガーの「貨幣生成論」との類似性を指摘しつつ、「ハイエクあるいはオーストリア学派の主張は、マルクス派の中にさえ無媒介に受け入れられていくかの感がある。それは市場過程における『分散的知識』（暗黙知）と『自生的進化』（自生的秩序）という言葉が符牒とするのであるが、それは文字通り『符牒』（あいことば）にとどまり、その含意、問題点が十分に探られることなくそのまま貨幣制度論、信用制度論に適用されていく傾向にある<sup>15)</sup>」と論じた。ハイエクの暗黙知や自生的秩序といった基礎概念は、必ずしもその理論的考察にとって常に整合的とは言えないというのである。そうして大黒は、ハイエクとマルクスとの間の理論的な共通点がある程度認めながらも、「非国有化」という表現に見られるように、ハイエクの貨幣理論もまた否定の文脈でしか活用され得ないとして、その妥当性を退ける。

ケインズ革命のインパクトに吹き飛ばされるかのように、理論経済学から一旦距離を取ったハイエクは、比較的晩年になってその集大成として『貨幣の非国有化論』（1974）を上梓した。ただ、上に見たような恐慌に関するテーマは、とりわけ初期のハイエクにおいてのみ追求されたテーマであった。また、初期ハイエクにおいては、社会思想的な領域に関するマルクスへの言及は、社会主義経済計算論争を除けば積極的には見られなかったのである<sup>16)</sup>。

## 1-2 知識論的考察

直接的な言及はないにしろ、初期ハイエクに特徴的な知識論のなかに、マルクスとの共通点を見出す指摘もある。経済学及び社会哲学へのハイエクの最も大きな貢献の一つは、かれ

15) 大黒 [1997] p.36

16) ハイエクは、社会主義経済計算論争のなかでもマルクスに何度か言及している。ただしこの論争そのものが、同時代の経済学者ディキンソンやランゲら「市場社会主義者」との直接の論争であるため、それらは消極的なものにとどまる。計算論争におけるハイエクの応答に関して詳しい考察は Caldwell [1997] を参照のこと。

が資本主義の優位性を、自由の擁護論だけでなく、知識論という側面から捉え直したことにある。端的に言えば、それは「時と状況に関する現場の知識」の重要性である。

市場において個人が行動を起こすとき、そこには主観的な認識に基づいた意思決定がある。そこで知識は、誰あるいはどこの組織にも統合的に把握された状態では存在しないので、市場社会に分散して存在すると解釈される。現場の知識は常にローカルでかつ特殊なものである一方で、物理法則などの一般的ないし普遍的な知識は「科学的知識」とみなされる。市場社会で有効なのは、常に前者の種類知識であって、後者の知識を過剰に評価することは、科学法則を社会に無自覚・無批判に適用せんとする合理主義として退けられる。こうしたハイエクに関する知識に関する洞察は、かれの社会哲学における人間観の根本に据えられている<sup>17)</sup>。

シャバラによれば、ハイエクが看破したこうした知識の性質について、マルクスもまた、人間知識を「本質的に制限されたもの」としてみなしていたのだという。ただしマルクスは、社会における「知識の分散」、つまりひとりの持つ知識が社会総体から見れば極めて「断片的」であることは、労働者が生産手段から疎外された結果であり、同時に資本主義の財産関係の一過性の副作用であると考えていた<sup>18)</sup>。こうした洞察は、上記のようなハイエクの知識論から導かれる見解とは対照的である。

ハイエクは、知識が断片的で決して一つの場所に集約され得ないという事実こそが、資本主義の発展を支えるメリットと捉えていたのであった。他方でマルクスの考えでは、こうした知識の断片化は、社会発展の一時的な特徴に過ぎず、社会主義や共産主義の社会ではそれがやがて克服されるべきものとみなされる。しかしながらシャバラは、それをマルクスの「妄想<sup>19)</sup>」と名づけて批判し、最終的に自由市場に基づく資本主義を主張するハイエクの思想こそが、マルクス的な社会主義あるいは共産主義のビジョンに勝利すると主張した。

## 2. 中期ハイエクにおけるマルクスへの言及

### 2-1 ユートピア論をめぐって

1940年代に入り、理論経済学から離れて社会哲学的考察に足を踏み入れたハイエクは、1944年に『隷従への道』を一般向けの書籍として上梓する。その骨子は、おおよそ以下であ

---

17) Hayek [1948] p.77-91 訳 pp.109-128

18) Sciabarra [1995] p.119

19) Sciabarra [1995] p.46

る。独裁で社会主義であれ、社会に計画を持ち込もうとする発想自体が、共に合理主義の誤った適用である。たとえイギリスのように資本主義の国であっても、そこで「計画」を指向することは、いずれ民衆を圧政に置く全体主義につながりかねないのである。

同書において社会主義が登場するのは、主にユートピアをめぐる議論の箇所であるが、ハイエクは同書の前半部分で、これに批判の矢を向けている。かれは、社会主義者の掲げる「新しい自由」、「平等」、あるいは「民主主義的社会主義」といった概念がいかに空想的で、非現実的であるかを論難した。こうした言葉が流布し、現実を導入されたとしても、隷従という悲惨な結末しかもたらさない、というのだ。

「社会主義からファシズムへの移行を間近で見てきた多くの人にとって、両体制の結びつきはいよいよ明らかになった。ところがイギリスではあいも変わらず大多数の人が、社会主義と自由は共存しようと信じ込んでいる。……あの民主社会主義というここ数世代の壮大なユートピアは実現不能であるばかりか、実現しようとするれば、今日それを望んでいる人々でも受け入れがたいほど、めざすものとは違う結果を生むにちがいない<sup>20)</sup>」。

ここでハイエクの言う「社会主義者」とは、単に社会主義体制を支持する人間だけを意味するのではなく、資本主義に計画を導入しようとする全ての「設計主義者」が含まれる。ロシアのような社会主義国家はもちろんのこと、純然たる資本主義国家たるイギリスやドイツにも、いまや社会主義者が蔓延している。本当は社会主義者である政治家や学者によって、「計画」は、一見理想的なものとして掲げられている。かれは、このことがいかに空虚で危険なものであり、最後は全体主義に至る危険性があるという警句を、イギリスの人びとに届けようとしたのだった。

ところが、こうした社会主義批判を真っ向から扱った書物のなかであっても、マルクスという人名あるいはマルクス主義という用語は何度か登場するものの、詳細な言及はほとんど見当たらない。同書においてかれの採った戦略は、社会主義を主張する思想家の言説そのものを批判するのではなく、社会主義の空想性を「ユートピア」として非難することだった。言い換えるとハイエクは、マルクスそのものを批判の対象とするよりも、ユートピア論を批判しようとした。

しかしながら、ハイエクの自由主義もまた、ユートピアとして解釈される可能性をはらん

---

20) Hayek [1944] pp.81-82 訳 p.171

でいると指摘されることもある。例えばシャバラは、ハイエクとマルクスの共通点を、ユートピア的理想主義に求める。かれによればハイエクの目指した自由主義思想に基づく社会像は、マルクスにおけるアソシエーションを元にした社会像と同様にユートピアとして理解できるという<sup>21)</sup>。こうした解釈はなるほどハイエクの社会像の一面をよく表していると言える。

若森もまた、「…ハイエクは、ユートピアと抽象的な思想を好む知識人を惹きつけることができるような市場経済の哲学とビジョン——知識人を魅了する新しい自由主義の理念を創出することが、反資本主義な雰囲気と諸政策を資本主義的な雰囲気と諸政策へと逆転させる契機をつくりだすための新自由主義的プロジェクトの核心になる、と宣言した<sup>22)</sup>」と述べて、ハイエクの自由主義をユートピア的ないし理想主義的と解釈した。

さらに間宮も、ハイエクの思想にユートピア的思考を見出し、次のように評した。「ウィーンでは時代と時代が激しくぶつかり、二つの時代の間にはぼっかりあいた真空の隙間を作った。……ハイエクの知的活動も、……このような時代状況を背景としていると思われる。かれは自由主義が衰退し、自由があらぬ方向に展開せしめられているのを目のあたりにして、自由の再構成に乗り出そうとするのだ。その意味でかれは自由のユートピアンだと言えるかもしれない<sup>23)</sup>」。

しかしながら、例えば渋谷は、ハイエクの言う「ユートピア」の意味に、マルクスの言う「ユートピア」と「論じ方」が類似している点を指摘し、両者がともに理想主義的でなく、現実主義的である点に、反ユートピア的要素を見出す。「一見したところ、マルクスによる『自由・平等』のイデオロギー批判とハイエクによる社会主義批判は、なんら接点がないどころか対立関係にあるようにも思えるが、『観念の温存』あるいは観念の濫用による『ユートピア』を批判している点で、似ている<sup>24)</sup>」のだと言う。つまり渋谷は、マルクスもハイエクも、現存のイデオロギーが目指す理想を批判し、現実を直視することを重視している点で、かれらの目指す思想は、共にユートピア的とは言えないと主張するのである。

この点について、確かにハイエクは、以下の記述に見られるように、マルクスの思想をユートピア的だと特徴づけることには賛成しないように見える。

「……（マルクスとマルクス主義者たちのような）もっとも影響力のある社会主義の一

21) Sciabarra [1995]

22) 若森 [2017] p.17

23) 間宮 [2006] p.52

24) 渋谷 [2003] p.114

派が、当時の社会科学における一般的な反理論的傾向と、かくも密接に関係していたという事実は、社会主義の現実の諸問題についてのその後のすべての議論の上に甚大な影響を与えた。それによる全体的な見通しは、歴史的な枠組みと無縁である永続的な経済問題のどれひとつをも見るができないという奇妙な不能の状態をつくりだし、またさらにマルクスとマルクス主義者たちは、将来の社会主義社会の現実の組織と作用についての研究を行わしめないように、終始一貫、積極的に前進し続けたのであった。……マルクス自身は、このようなユートピアにおける実行計画を意図的に立てようとする試みにたいしては、すべてそれを軽蔑し、嘲笑した。われわれはマルクスの著書のなかに、新しい社会はこのようではないであろうというかれの叙述を時たま見いだすが、それはこのような否定的な形のものとしてである<sup>25)</sup>」

したがって、ハイエクは自由主義を、マルクスは社会主義を志向しながらも、かれらの目指す理想社会は、決してユートピアつまり理想郷として語られるのではないことになる。かれらはむしろ、現実的な社会像を論じたのである。

## 2-2 サン＝シモン主義批判

1940年代のハイエクは、理論経済学から離れ、徐々に社会哲学的な分野へと関心を移していく途中にあった。そうしたなかで、かれは理論や思想の「論じ方」について自覚的になっていき、方法論に関する論考をいくつか残している。それをまとめたものが1952年刊行の『科学による反革命』である。ただし同書で真っ先に批判の矛先を向けたのは、サン＝シモン主義であり、マルクスではなかった。その理由は、かれが当時の社会主義思想においてサン＝シモンの影響はきわめて強く、そこでマルクスによって付け足された主張はほとんどないと考えていたことによる。

「こんにち人口に膾炙した一般的な社会主義にかんする限り、サン＝シモン主義の思想に付け加えるべきものはほとんどなかった。サン＝シモン主義者たちがいかに甚大な影響を現代の思想に及ぼしたかについての印としては、どれほど広範に、すべてのヨーロッパ語がかれらの語彙を借用しているかに触れるだけでよい。『個人主義』、『産業家』、『実証主義』、そして『労働組合』など、全てが『解説』（筆者注：サン＝シモンのフォロワーによってまとめられたサン＝シモン主義の思想をまとめた著作）に登場するので

25) Hayek [1948] p.128 訳 p.178

ある<sup>26)</sup>」。

ハイエクのみるところ、サン＝シモン主義の主張する望ましい社会像とは、社会全体をひとつの工場と同じように運営することであり、それはマルクス、レーニンまで同様である。「……サン＝シモンからマルクス、レーニンにいたるすべての社会主義者たちのあいだで、社会全体が現在個々の工場が運営されているのと正確に同じ仕方でも運営するべきであるというフレーズが流布していたことに示されている<sup>27)</sup>」。つまり、一つの国家について、私有財産を廃止したうえで、一つの工場を運営するように、一元的に管理・運営しようという思想である。しかしながらこの考えは、先に確認したような知識観を持つハイエクからは、当然退けられる。

市場経済は、個別具体的・一般的でローカルな「現場の知識」しか持たない人びとが、「現場の判断」にしたがって意思決定し、それが無数に実行し、ときに修正されるプロセスのなかではじめて効率的な経済活動が可能である。どこにでも当てはまるような普遍性を持った知識—その代表例は「科学的知識」である—は、状況が変われば、すぐに役に立たなくなる。「科学的」であることは、社会主義者にとっては自らのイデオロギーを正当化するうえできわめて重要な特徴であったが、ハイエクにとっては、非現実的な思想とみなされるのである。

ハイエクにおけるマルクスとサン＝シモン主義に対する批判について、山中も同様に、著書の本論ではないものの、「補論1 ハイエクにおけるマルクスの軽視をめぐって」として取り上げている。山中によれば、

「ハイエクが社会主義を論駁しようとするにあたって重視したのはサン＝シモン主義であった。……ハイエクはマルクスについていくつかの言及は散発的に行っていたものの、まとまった形での論述は全く残さずに終わった<sup>28)</sup>」

のだという。その理由を山中は、

「かれが全体主義の本質をもっぱら集産主義＝中央統制経済に求めていたからであった

---

26) Hayek [1952] p.280 訳 p.173

27) Hayek [1952] p.173-174 訳 p.268

28) 山中 [2007] p.213

と思われる。すなわち、かれの理論的・思想的関心は主として私有財産制の廃止を計画経済化のために行おうとした“社会主義”に対して向けられていたのであって、私有財産制の廃止を真の友愛関係の回復のために行おうとする“共産主義”に向けられてはいなかった<sup>29)</sup>」

からだと考えている。つまり、ハイエクはマルクスのことを、何より社会主義者ではなく共産主義者だとみなしていた。ハイエクが生きた時代の「社会主義」は、サン＝シモン主義に多くを負っている以上、その批判はマルクスその人ではなくサン＝シモン主義に向かうことになるのだ。

この点はきわめて重要な論点を含んでいる。中期ハイエクに見られる社会主義批判は、1944年の『隷従への道』で見られるような計画経済批判に端を発するが、1952年の『科学における反革命』においても社会主義批判に留まり、共産主義あるいはマルクスそのものへの批判まで拡大することはなかった。マルクスに対する言及が少なく、サン＝シモンあるいはサン＝シモン主義の考察が多いのも、ハイエクはマルクスが与えた社会主義への影響を限定的と見ていた証左であろう。繰り返しになるが、かれが生きた当時の社会主義とは、ほぼサン＝シモン主義の影響下にある計画経済を進める思想に他ならないからだ<sup>30)</sup>。

コールドウェルによれば、中期ハイエクの執筆活動の計画は、1939年に論文「自由と経済体制」を書くなかで自身が打ち立てた「理性の濫用プロジェクト」を、順に著書として発表することであった<sup>31)</sup>。この名称の真に意味するところは、理性の濫用を「批判するための」プロジェクトとなろう。人間理性の濫用あるいは思い上がりとは、単に資本主義か社会主義かの体制論だけで議論される問題ではない。むしろ、計画経済や独裁、全体主義なども含めた世の思想が、どれほど人間理性の濫用に基づくものかを順番に、そして周到に批判する一連の格闘へと、この時期のハイエクは足を踏み入れたのだった。

このプロジェクトは4部構成を予定していたが、結局未完に終わった。第1部は講演「真の個人主義と偽の個人主義」（1945）として発表されのちに論文になり、第2部は論文「科学主義と社会の研究」（1942）に、第3部は『科学による反革命』（1952）の一部に、第4部

29) 山中 [2007] p.214

30) ただしコールドウェルが指摘しているように、マルクス＝エンゲルスの社会主義とサン＝シモンのそれとは、必ずしも同じ意味ではない。「マルクスとエンゲルスは自分たちのブランドの社会主義を『科学的』と称した。これはサン＝シモン、フーリエ、オーウェンなどといった以前の社会主義者の『ユートピア的な』スキームとは対照的である」。Caldwell [2003] p.105 訳 p.127

31) Caldwell [2003] p.258 訳 p.295

は『隷従への道』（1944）となった。こうしたなかで、ハイエクの言論活動における批判は、単に社会主義の主唱者としてマルクスに向けられるのではなく、その根底にある思想、つまり合理主義や科学主義に向けられていくことになる。

### 3. 後期ハイエクにおけるマルクスへの言及

1960年代以降のハイエクは、理論経済学からも方法論研究からも離れ、代表作『自由の条件』（1960）や『法と立法と自由』（1973, 76, 79）、『致命的な思い上がり』（1988）のように、法学や政治学も含めて自由主義社会の基本的なあり方について広く論じるような、社会哲学分野の研究にもっぱら取り組んだ。1974年のいわゆるノーベル経済学賞の受賞や、1980年代以降の新自由主義の隆盛という背景のなかで、こんにちハイエクが高く評価され、耳目を集めるのは、この時代の業績に対してである。そのなかで、かれは、マルクスをどのように評価していたのか。

ここでもハイエクによるマルクス批判は、社会主義に関連するものとして少し触れられているに過ぎず、徹底的なものとは言い難い。おそらくマルクスは、資本主義そのものが不要であると言ったわけではない。社会主義へと至る過程には、資本主義を通過することはむしろ必要なのである。そして、資本主義が人びとに豊かさを与えたという認識も共通するであろう。

「資本主義は雇用の可能性を生み出した。それは、自分のその子供を養うのに必要な道具や土地を親からは与えてもらえなかった人びとが、他者からそれを授けられ相互の利益に資することのできる状況を生み出したのである。……カール・マルクスが『資本主義』はプロレタリアートを生み出した、つまりかれらに命を与えたと主張したのは正しかったわけである<sup>32)</sup>」。

マルクスは資本主義が進展すると労働者の分業が固定化し、労働力の価値が低下する<sup>33)</sup>と主張した一方で、ハイエクは分業の進展は、労働者の生活水準を向上させると考えたのであった。こうした懸隔が生じた理由は、そもそも「社会」（ハイエクの言い方では「文明」あるいは「市場」）に対する見方が異なることに起因する。

---

32) Hayek [1988] p.124 訳 p.184

33) 佐々木 [2018] p.344

後期ハイエクに特徴的な概念に、「自生的秩序」がある<sup>34)</sup>。これは、もともと世の中にあつたものでも、誰かが一世代で作りに上げたものでもない、人間行為の累積的な結果として意図せずして現れた制度のことを指す。具体的には価格システムや、貨幣や言語、ルール、慣習などが挙げられる。そして、市場社会には、自生的秩序の形で、過去や同世代の人びとの知識が蓄積されている。すでに述べたように、人間ひとりの知識はローカルなものに過ぎないが、その「生まれながらの無知」を、自生的秩序に埋め込まれた知識を（時に意図せずに）使うことができる。これこそが市場社会のメリットである。ハイエクによれば、社会主義は、知識が活用されるこうした有益なシステムを破壊するシステムなのである。

ハイエクの著作群におけるマルクス評のなかで唯一節タイトルのついた、そしてもっともまとまった文章は『法と立法と自由』三部作の最終章、「人間的価値の3つの源泉」にある、「古い本能を満足させる新しい道徳の構成—マルクス」の箇所である。それでも原著で3ページほど、マルクスの名前が3度登場するのみであるが、先にその一部を見ておこう。

「個人行動に関する適切なルールは偉大な社会において秩序の形成を引きおこすが、どのようにしてそれが引きおこされるのか、とくにカール・マルクスはまったく気づかなかった。それを知る最良の方法は、何がかれに資本主義的生産の『混沌』について語らせたかを問うことである。むろん、かれが人びとに何をすべきかを知らせる価格のシグナル機能を正しく評価しなかったのは、かれの労働価値説のためである。価値の物的原因を探る無益な研究によって、価格を人びとが自己の生産物を販売するにはなにをしなければならないかを教えるシグナルとしてよりも、むしろ労務費すなわち人びとが過去にしたことによって決定されるものとみなした<sup>35)</sup>」。

ここでのハイエクの主張は、資本主義に特徴的な価格システムが知識の補完という積極的な意味を持っているのに対して、マルクスはその意義を理解できなかった、というものである。かれによれば、市場システムは、共有されているルールが秩序の形成に貢献し、そうして市場自体がさらに大きくなっていくことで、またそれが再帰的にルールのあり方を規定するようになる。こうしてルールと秩序が相互に発展していくなかで、価格システムを含めた市場社会は複雑さを増し、そのことこそが人びとが豊かになっていく根拠となるのである。

ハイエクは、ある用語をしばしば別の箇所でも別の表現で言い換えることで、その説得を深

---

34) Hayek [1973] pp.35-52 訳 pp.50-74

35) Hayek [1979] p.170 訳 pp.231-232

めようとするが、ここでも自生的秩序を「自己増殖的秩序」や「自己管理的秩序」と置き換えている。これに関する説明にも、マルクス主義に対する言及がある。

「……あらゆるマルクス主義者は、こんにちに至るまで、先の自己増殖的秩序を理解することも、あるいは自らの方法を決定する法則を知らない淘汰的進化がどのように自己管理的秩序を生み出しうるかをまったく知らないでいる。中央管理によっては、さまざまな事象について何百万もの人びとがつねに変化する意識に絶えず適合して、効率的な社会的分業を達成することは不可能である<sup>36)</sup>」。

ハイエクは、自身の自生的秩序論を、マルクス主義者はまったく受け入れないと考えている。自生的秩序においては、人びとが自由に行動し、現場の判断に基づいて意思決定を行う。それこそが、市場システムという分権的なシステムの効率性の源泉である。他方で中央集権のシステムでは、自律分散的な意思決定ではなく、集権的に管理された決定や配分が行われるが、効率性の点で市場システムに劣る。にもかかわらず、社会主義が支持され、実際にそれに基づいた社会が存在するのはなぜか。ハイエクによれば、それは「平等への幻想」を人びとが持っているからである。

例えばハイエクは次のような文章において、みながそう考えるようになったのはマルクスのせいではないと断りを入れつつも、社会主義の欠点は、平等主義的な思想にあると述べる。「……もし社会主義という幻想が遅かれ早かれ失望に終わるにちがいないとすれば、設計主義的な道徳におけるもっとも破壊的な要素は平等主義である（その罪をカール・マルクスに負わせることはできないが<sup>37)</sup>」。かれにとって、平等主義とは、人びとの自由な意思決定を限定させ、特定の行動に仕向けることで成立する。「平等主義的な分配は、人びとが一般活動のパターンに自らをどう適合させていくべきか、という個人の決定のための基礎を必然的に取り払い、あらゆる秩序として完全な命令だけを残すであろう<sup>38)</sup>」。

そもそも社会主義は、人びとの行動を制限し、政府による一元的な管理を導入することで成立する。そこには、これまでの知識の蓄積の棄却、言うなれば「道徳の破壊」がある。社会主義とは、人びとが何世代もかかって作り上げた制度を、設計主義によって一世代ですげかえるシステムなのである。このような設計思想は、常に科学的たろうとする特徴を持つ。社会主義者たちは、しばしば自らの思想を科学的であることにその正当性を持ち込むが、ハ

36) Hayek [1979] p.170 訳 p.232

37) Hayek [1979] p.170 訳 p.232

38) Hayek [1979] p.170 訳 p.232

ハイエクはこうした思想を誤った意味での行き過ぎた「科学主義」だと批判し、それを「設計主義的合理主義」だと看破した<sup>39)</sup>。

さらに社会主義者は、自らの考えを「進歩的」だとみなす傾向があるのだという。しかしながら、ここで社会主義とは決して進歩的ではなく、むしろ反動的な「部族社会への先祖返り」だとみなされる。

「……正しい分配にたいするかれらの要求は、厳密には原始的情緒に基づいた先祖返りである。というのは、人びとに受けるべきものを配分するために、組織された権力が使用されることになる。またこれらの支配的な情緒に、預言者、道徳哲学者、及び設計主義者は新しいタイプの社会を故意に創造する計画を立てることによって訴えている<sup>40)</sup>」。

部族社会は、人びとが属する集団をひとつのまとまった総体として捉え、具体的な命令とそれを遂行するリーダーによって、一元的に管理・運営される。他方で文明社会は、抽象的な原則（例えばしてはならないことを定めた法律）が存在するだけで、基本的に意思や行動の決定は人びとに委ねられているのが特徴である。

原則に基づいた自律的な行動があちこちで繰り返され、市場システムはより複雑さを増すことで発展するし、それが進めば進むほど、一元的に人びとを管理することは難しくなる。ところが、社会主義の思想家は、古代の部族社会と同様に、社会の規模が大きくなったとしても、そうした管理ができるとの想定に立っているのだという。ハイエクに言わせれば、これもまた科学主義あるいは合理主義の産物である。

こうしたかれの考えは、最後の著作『致命的な思いあがり』（1988）においても展開されている。

「……かれら（注：社会主義の作家たち）の著作を入念に精査すればするほど、かれらがアニミズム的思考や言語の改革よりもはるかにその保存に役立ったことが明らかになるのである。ヘーゲル、コント、そしてマルクスの歴史主義的な伝統における『社会』の人格化を例にとってみよう。社会主義は事実、その『社会』については（その『神々』をとともなう）さまざまな宗教に代表される、秩序にかんするアニミズム的な会社格の最新版なのである。社会主義は宗教に敵対しているという事実によっ

---

39) ハイエクの科学主義については Caldwell [1994] を参照のこと。

40) Hayek [1979] p.166 訳 p.226

て、この主張が弱められることはほとんどない。すべての秩序は設計の産物だと思っているので、社会主義者は、秩序はある優れた精神のよりよい設計によって改良できるはずだと結論するのである。このために、社会主義はさまざまな形態のアニミズムの権威ある目録の一角を占めるに値するのである<sup>41)</sup>」

このように社会主義は、部族の酋長が集団全体を統治するかのようになり、社会を擬人化された一つの大きな組織のように捉えて運営する。こうした運営は、設計や一元的管理によらずして自律分散的に発展してきた文明社会とは、ほとんど真逆の発想なのである。

## おわりに

本稿では、ハイエクのマルクス主義批判を追いながら、そこで問題にされてきたトピックを抽出し、順に検討してきた。そもそもの関心は、ハイエクのマルクスへの言及が不十分であることに着目し、それを改めて時系列的に追うことで、マルクスないしマルクス主義批判の概要を明らかにすることであった。第1節でみたように、初期ハイエクが取り組んだ理論経済学的な分野について言えば、確かにハイエクは理論の出発点としてマルクス流のドイツ語圏経済学の影響を受けている。とくに、恐慌をめぐっては、それを資本主義に不可避的なものとする点で、両者の関心に重なるところがあったとも言える。

しかしながら、第2節以降で確認したように、中期ハイエクが理論経済学から離れ、政治思想や方法論の分野に関心が移行していくと、社会主義やその根底にある科学主義や合理主義の批判にその主眼が置かれるようになった。そしてそれは、マルクス自身に対する批判よりも優先された。その理由のひとつとして、その世代における社会主義とは、とりもなおさずサン＝シモン主義の影響下にある計画経済を意味したのであって、ハイエクにとってマルクスは共産主義としてカテゴライズされていたことを挙げた。

第3節で見たように、後期ハイエクは社会主義がひとつの先祖返り、つまり部族社会に逆戻りしたシステムだと批判した。社会全体を見渡したうえで組織を運営しようとする思想は、合理主義の産物である。設計主義によって唐突に導入された社会主義は、これまで文明が築き上げてきた知識の蓄積を破壊し、市場の恩恵を捨て去ってしまうのだ。

マルクスは資本主義の存在自体を否定したのではなく、社会発展の一段階としてはむしろ不可避的だと考えていたが、そのなかで中産階級がゆっくりと死に絶えていく様に警鐘を鳴

---

41) Hayek [1988] pp.107-108 訳 p.162

らした。他方でハイエクはそのクラスこそが豊かさの恩恵に預かれると考えた。かれは資本主義の発展を否定せず、むしろスミスのように肯定する立場をとった。したがってハイエクの論拠からすれば、資本主義あるいは自由主義のシステムは、個人的自由が守られるべきというその価値的な（義務論的な）意義だけでなく、それがより多くの豊かさをもたらすという意味で手段としても（帰結主義的にも）擁護されている。

本稿で扱ったようなハイエクによるマルクス（主義）批判は、徹底的であるとは言い難いものであったが、現代においてもマルクスの思想はしぶとく延命し、格差や環境など、新たなトピックのなかで再評価が進んでいるようである<sup>42)</sup>。他方で、ハイエクなどの自由主義経済思想は、市場社会の矛盾が指摘される昨今にあつて、必ずしも肯定的に参照されているわけではない。むしろ、批判の対象となることが多いように見える<sup>43)</sup>。しかしながら、単に社会主義か資本主義かという体制選択の問題を超えて、両者の経済思想はどちらも見直されるべき価値を持っていると思われる。

本稿でも確認したように、ハイエクの著作は、自由主義の擁護や小さい政府論の根拠として引用されるだけにとどまらない射程を持っている。例えばペニントンの論考では、とりわけコロナ禍のような危機の時代のなかで、それらを部分的な社会改良こそが必要だとする指針として読む可能性が示されている<sup>44)</sup>。同論文で強調されているのは、ハイエクが論文「複雑現象の理論」(1964)で展開した、社会科学と自然科学の区別を複雑現象と単純現象という分類に置き換えるという洞察である。

なるほどコロナ禍における公衆衛生や医学や疫学などの専門家、あるいはその意見を集約する役割を担う政府の政策立案の担当者は、社会で起きているできごとに対して、そもそも部分的な議論しか知り得ない。このため、新型コロナウイルスという新しい感染症に対して社会がどう向き合うか、どのような対策が必要かについても、誰かが「正しく」意思決定するだけの知識を持つことは難しいのだ。そもそもハイエクは、「科学主義」として自然科学を社会科学へと単純に適用できる考え方に批判的であった。

ここ最近の日本政府のコロナ禍への対応などを見ても、経済的な事象を多分に含む「対策」の方向性について、自然科学の専門家の意見が、社会科学者のそれよりも重視されてきたように思える。感染症を扱う専門家の意見はもちろん軽視されてはならないが、ハイエク

---

42) 代表的なものとして斎藤 [2020] を参照のこと。

43) これについては枚挙にいとまがないが、ここでは Harvey [2005] を挙げるだけにとどめたい。

44) Pennington [2021]

的な知見から言えば、かれらの学問的知見もまた、社会に関するひとつの見方に過ぎない。したがって、ひとつの専門的な知見からの意見を、あたかも社会全体を全て把握したうでの物言いのように考えることは、ハイエクからすれば「思い上がり」と批判されるであろう。われわれができることは、部分的に社会を発展させていくこと、言いかえるとトライアルアンドエラーを繰り返しながら、より適切なルールを進化させていく下地を作ること、くらいなのである。

このように考えると、かれの経済思想は、ドラスティックな改革に対抗する「漸進的な社会改良主義」と解釈することも可能である。かくしてハイエクの主張は、かれの主張のなかの自由論を背景に追いやったとしてもなお、望ましい社会像の探究のために有効なメルクマルとなる。

最後に、現代に生きるわれわれが過去の思想家とどう向き合えばよいかについて、マルクスの思想史研究に対する植村の叙述を引いておこう。

「……マルクス論が私たちに提起しているのは、マルクスをどう理解するかという問題だけでなく、そもそも思想史の方法とは何かという問題でもある。ある言説をその歴史的コンテクストに即して内在的に検討し、その言説の同時代的意味を確認したうえで、現代的意義を明らかにすること。それが社会思想史の役割だと私は考えている。そのためには、歴史上のある言説を前にして、アダム・スミス風に言えば、立場の交換によってその人間に『ついていく』努力をしなければならないし、クエンティン・スキナー風に言えば、その言説を発することにおいてその人物は何をしているのか、ということを広い文脈から考えなければならない（強調筆者）<sup>45)</sup>」。

まさにこれからのハイエク論においても、同時代的な意味を内在的に確認するだけでなく、現代的な文脈に照らして、その意義を問うことが求められていくと言えよう。

#### 参考文献一覧

- Boettke, P. J. (1995) 'Hayek's the Road to Serfdom Revisited: Government Failure in the Argument against Socialism', *Eastern Economic Journal*. Palgrave Macmillan Journals, 21(1), pp. 7-26.
- Boettke, P. J. (2018) *F.A. Hayek: economics, political economy and social philosophy*. Palgrave Macmillan (Great thinkers in economics / series editor, A.P. Thirlwall).
- Burczak, T. A. (2006) *Socialism after Hayek*. University of Michigan Press (Advances in heterodox

45) 植村 [2005] p.67

- economics).
- Caldwell, B. (1994) 'Hayek's Scientific Subjectivism', *Economics and Philosophy*. Cambridge University Press, 10(2), pp. 305-313.
- Caldwell, B. (1997) 'Hayek and Socialism', *Journal of Economic Literature*. American Economic Association, 35(4), pp. 1856-1890.
- Caldwell, B. (2004) *Hayek's challenge : an intellectual biography of F.A. Hayek*. University of Chicago Press. (田村勝省訳 (2018) 『ハイエク：社会学方法論を巡る闘いと経済学の行方』、一灯舎)。
- Ebenstein, A. (2001) *Friedrich Hayek: A Biography*. University Of Chicago Press.
- Harvey, D. (2005) *A brief history of neoliberalism*. Oxford University Press. (渡辺治ほか訳 (2007) 『新自由主義：その歴史的展開と現在』、作品社)。
- Hayek, F. A. von (1948) *Individualism and economic order*. University of Chicago Press. (嘉治元郎・嘉治佐代訳 (2008) 『個人主義と経済秩序』、春秋社 (ハイエク全集))。
- Hayek, F. A. von (1952) *The counter-revolution of science : studies on the abuse of reason*. Free Press. (渡辺幹雄訳 (2011) 『科学による反革命』、春秋社 (ハイエク全集))。
- Hayek, F. A. von (1973) *Rules and order*. University of Chicago Press (Law, legislation, and liberty : a new statement of the liberal principles of justice and political economy vol.1 (矢島鈞次・水吉俊彦訳 (2007) 『法と立法と自由 第1巻：ルールと秩序』、春秋社 (ハイエク全集))。
- Hayek, F. A. von (1979) *The political order of a free people*. University of Chicago Press (Law, legislation, and liberty : a new statement of the liberal principles of justice and political economy vol.2 (渡部茂訳 (2008) 『法と立法と自由 第3巻：自由人の政治的秩序』、春秋社 (ハイエク全集))。
- Hayek, F.A. von (1988) *The Fatal Conceit: The Errors of Socialism*. University of Chicago Press. (渡辺幹雄訳 (2009) 『致命的な思いあがり』、春秋社 (ハイエク全集))。
- Hayek, F. A. von (2007) *The road to serfdom : text and documents*. Definitive ed. University of Chicago Press (The collected works of Friedrich August Hayek). (村井章子訳 (2016) 『隷従への道』、日経BPマーケティング (Nikkei BP classics))。
- Hayek, F. A. von (2008) *The pure theory of capital*. Routledge (The collected works of Friedrich August Hayek). (江頭進訳 (2011) 第2期第8巻-第9巻『資本の純粹理論』、春秋社 (ハイエク全集))。
- Harvey, D. (2005) *A brief history of neoliberalism*. Oxford University Press (渡辺治他訳 (2007) 『新自由主義：その歴史的展開と現在』、作品社)。
- Rosner, P. (1988) 'A Note on the Theories of Business Cycle by Hilferding and by Hayek', *History of Political Economy*. Duke University Press, 20(2), pp. 309-319.
- Sciabarra, C. M. (1995) *Marx, Hayek, and utopia*. State University of New York Press.
- Vorhies, F. (1989) 'Marx on money and crises', *Critical Review*. Routledge, 3(3-4), pp. 531-541.
- 飯田 裕康 (1984) 「『資本論』第3部第5篇(下)：その成立と現代」、『三田学会雑誌』、慶應義塾経済学会、76(6), pp. 837(105)-850(118)。
- 伊藤 誠 (2014) 「『資本論』の恐慌論と現代の世界経済危機 (<特集>マルクス恐慌論をめぐって-恐慌論と21世紀型危機)」、『季刊経済理論』、経済理論学会、51(3), pp. 7-19.
- 植村 邦彦 (2005) 「研究動向 唯物論と自然主義をめぐって——2004年のマルクス (特集 産業社会の倫理と政治——思想史の方法論的視座を問う(1))」、『社会思想史研究』、藤原書店、(29), pp. 59-68.
- 宇野 弘蔵 (2010 [1953]) 『恐慌論』、岩波書店。
- 江頭 進 (1999) 「ハイエクと大恐慌：理論と観察の狭間で」、『経済学史学会年報』、経済学史学会、(37), pp. 82-94.

- 小島 秀信 (2004) 「マルクスにおける政治否定のロジック：初期マルクス法・政治思想の新地平」、『政治思想研究』、政治思想学会、4, pp. 141-162.
- 斎藤 幸平 (2020) 『人新世の「資本論」』、集英社 (集英社新書)。
- 佐々木 隆治 (2018) 『マルクス資本論』、KADOKAWA (角川選書)。
- 柴山 桂太 (2014) 「ハイエク、ケインズ、マルクス—新自由主義後のハイエク」、『ハイエクを読む』、ナカニシヤ出版、pp. 223-254.
- 渋谷 謙次郎 (2003) 「マルクス・ハイエク・法」、『神戸法学雑誌』、神戸法学会、53(2), pp. 111-151.
- 大黒 弘慈 (1997) 「バジヨットの単一準備制論——マルクスとハイエクの『失われた環』」、『経済学論集』、62(4), pp. 36-67.
- 間宮 陽介 (2006) 『増補 ケインズとハイエカー「自由」の変容』、ちくま文庫。
- 山中 優 (2007) 『ハイエクの政治思想：市場秩序にひそむ人間の苦境』、勁草書房。
- 吉野 裕介 (2014) 『ハイエクの経済思想：自由な社会の未来像』、勁草書房。
- 若森 みどり (2017) 「シュンペーターとハイエク：社会主義への前進と新自由主義的逆転」(小林純教授記念号)、『立教経済学研究』、立教大学経済学研究会、70(3), pp. 25-51.